カワズ
作、H2O
絵、poteimo

何かを作る事が得意な種族と聞かれると、幻想郷に住む者達なら真っ先に河童の存在を挙げる事だろう。機械を弄るのが好き、と広くに知られる河童だが、しかし実の所、誰しもが機械弄りが好きなわけではない。その辺りは趣味趣向と言うものだろう。外の世界から流れてくる型落ちの機械を弄る者が多いから勘違いされやすいが、河童とはつまりエンジニア、技術者の集団である。

ゆえに、確かにその多くは機械弄りに長けた者達であるが、土蜘蛛に劣りこそすれど、建物、建築技術に長けた者や、彫金等の細かな細工技術に長けた者もいる。中には何に影響されたのか、専ら胡瓜を使った料理だが、調理技術を高めようと日々精進している者だっていたりする。

彼女は元々は、建築系技術に興味のある河童の少女だった。金髪で、他の皆より少し背が高くて、少しプライドが高くて、少し生意気で、世間知らずなどこにでもいる普通の河童の少女だった。

だが、彼女の建築技術の腕はと言うと、実はそれ程良いわけではない。贔屓目に見てせいぜいが中の中、普通程度であった。それでも彼女はその事を特に気にした事はなかった。彼女にはその他に誇れるものが一つだけあったからだ。

それが歌だった。

ずっと昔、河童達の集落でお祭りがあった。その中で余興の一つとして喉自慢なんてものが開催された。機械弄りが好きな河童の一人が、自分が手を加え作り直した拡張器を使ってみたいと言った事から起こったイベントだった。

蓄音機から流れる音に合わせて、思い思いに歌を歌う。畑違いの、お世辞にも上手いとは言えないイベントではあったが、祭りの雰囲気もあり意外な盛り上がりを見せた。その中で彼女は優勝した。

参加した河童達に比べれば、頭一つ、二つ程度は抜きん出ていたぶっちぎりの優勝だった。

その後彼女は、噂を聞いた鬼達の宴会に呼ばれ、そこでも歌を披露した。すっかり出来上がっていた鬼達は更に上機嫌になり、河童の少女を口々に湛えた。それはもしかしたら、支配者である鬼達を前にしても歌を歌えた少女の度胸を褒め称えていたのかもしれない。

でも、それが彼女には何よりも嬉しく、誇らしい事で、エンジニアの世界よりも、音楽や歌の世界に強く惹かれるきっかけとなってしまった。

同族の河童だけではなく、あの鬼達さえも称える自分の歌は、きっと稀有な素晴らしいものなのだ、と。

自分にはきっと油まみれになったり、手をマメやタ